

高等学校普通科におけるアクティブ・ラーニングと評価の在り方に関する研究 ―愛知県における多様な学習活動と評価の状況から見えるもの―
小塩 卓哉（愛知県立小牧南高校）

1. はじめに

本発表は、始めに筆者が責任者を務めた平成 27 年度の愛知県公立高等学校長会普通科部会の研究「高等学校普通科における授業評価に関する研究―多様な学習活動と評価活動による授業改善に向けて―」の概略について触れた後、愛知県におけるアクティブ・ラーニング（AL）の現状を踏まえて勤務校で実施している「生徒会活動を通じたアクティブ・ラーニング」と「国語科授業におけるアクティブ・ラーニングの研究」について紹介をした。

愛知県では、平成 25 年に文部科学省から愛知県教育委員会が受託し三年計画で始まった「高等学校における『多様な学習成果の評価手法に関する調査研究』」が、既に終了している。この研究は、愛知県総合教育センターと研究校五校との共同研究で、パフォーマンス課題や、ルーブリックを用いた評価方法について研究が進められ、アクティブ・ラーニングと深くかかわる研究となった。この研究の成果を踏まえた上で、先に挙げた「高等学校普通科における授業評価に関する研究」は行われた。本年度からは、アクティブ・ラーニングに関する県の研究指定校四校（本校を含む）でALの研究が始まっている。

2. 「高等学校普通科における授業評価に関する研究」の概要

本研究では、教科の枠を越えた汎用的な能力を身に付けさせるために、どのような学習活動や評価が、県内で行われているかを調査

した。研究指定校のみならず、各学校の取組の状況をまとめることで、昨今重視されている多様な学習活動に関わる評価方法の改善につなげるのがこの研究の目的である。

研究方法としては学習活動の在り方や評価方法の実施状況について、アンケート調査を実施した。アンケート内容は、各教科における学習活動の中で、パフォーマンス課題を用いた活動、協働的な学び、主体的活動等の実施状況について尋ねた。また、ルーブリック及びポートフォリオの利用例、今後の意欲についても調査を行った。アンケート調査は、愛知県内の、全日制普通科及び総合学科から 50 校を選び実施した。

アンケートの結果を以下の通り。座学型・講義型以外（従来からある実習・実技は除く）の授業状況を教科別に調査した結果、49 校で実施していることが分かった。座学型・講義型以外の授業を行っているとは回答した教科別の学校数は、理科が 37 校と最も多く、次いで地歴公民科 29 校、外国語科 28 校と続く。少ないのは国語科と芸術科の 9 校であった。

調査した 9 つの教科における授業形態を合計し分類すると、生徒発表とグループ討議の二つで過半数を占めた。これらの形態は従来の講義型授業とも併用をされてきたものであろう。実験・観察は、最も校数の多い理科においてよく行われる形態だが、やはり、講義型授業との併用が多いものと思われる。その他、選択肢で聞いた、ITC活用、実験・観察、TT、ディベート以外の授業形態では、ペアワーク、プレゼンテーション、ロールプレイングなど多様な形態が挙げられた。

課題解決型学習、探求型学習の実施状況は、十分に行われている 0%、おおむね行われている 16%、あまり行われていない 76%、ほとんど行われていない 8%という状況である。

「総合的な学習の時間」では、教科以上に課題解決型学習が進んでいることが分かった。

アンケートを通して、研究指定校以外でも、

新たな学習スタイルや評価方法に関する実践が導入され始めていることが分かったのは収穫であった。また、教科会だけでなく、校長のリーダーシップのもと組織的に授業開発の研究をすることが必要であること、パフォーマンス課題やルーブリックといった今日的な評価の普及のみでなく、学校単位の研究を通じた、評価手法の開発や授業改善の普及が期待されていることが分かった。

なお、愛知県公立高等学校長会普通科部会では、学校行事と各教科のALとの関係性についても研究しているが、ALの導入には教科と特別活動とに相関関係があることが判明している。教科においてALを導入するには、特別活動でのALが重要であることを踏まえて、勤務校では以下のような取組みを行った。

3. 小牧南高校における取組み

勤務校の実践としては、①生徒会活動を通じたアクティブ・ラーニング、②国語科授業におけるアクティブ・ラーニングの二つの事例について発表した。

①の事例は、愛知県立小牧南高校が、小牧市の事業「第二回小牧市夢にチャレンジ事業」に採択され生徒会執行部5名が取り組んだ実践で、「人権百人一首の編纂と紹介を通して、杉原千畝の人権精神に学ぶ」というものである。本校の生徒会は、この二年間、岐阜県八百津町が主催する杉原千畝記念短歌大会に応募してきたが、その短歌大会に寄せられた学生の作品約三万首から、優秀作品百首を選び、杉原千畝の人権・平和の精神を学び広めようというものである。杉原千畝の出身地八百津町の町長や、出身校の愛知県立瑞陵高校の生徒会・文芸部の生徒たちとの協議を経て決定した「高校生が選ぶ人権百人一首」を携えて、生徒たちは、リトアニア大使館、イスラエル大使館を訪問し、直接大使に百首を手渡し、千畝がリトアニアで成し遂げたこと、ユダヤ人を救ったことの意義について話し合

った。小牧市の選考で行ったプレゼンテーション、百首の選考会議、大使との面会の準備の過程こそが、まさにアクティブ・ラーニングという学習方法を具現化するものであったと思われる。

②については紙幅が尽きたが、自作について解釈をした後、相互に質問し合うという歌合わせ形式の授業方法である。審判役の生徒はルーブリックによって判定を下した。関心意欲だけでなくより深い解釈が可能となるところに利点のある方法である。

(早稲田大学教師教育研究所研究発表要旨／
2016年12月17日)